

○科学的根拠に基づいて、対話を進めようとしているが、対話が進まないときは 科学哲学でいう **incommensurable (同じ基準に立っていない)** という状態にあるときが多い。

○県とJR東海との対話において、両者は**「どの程度の環境影響評価を行うべきか」**について**「同じ基準に立っていない」**。

- ・JR東海: 県の意見は「過大な要求」
- ・静岡県: 最低限行うべきレベルのもの

○どちらの基準がより正しいかの問題ではなく、**環境に影響を与える側(能動側)は影響を受ける側(受動側)の基準を受け取め、自らの基準を省みることが必要**である。受動側は自分の基準が厳しすぎるものでないかを意識すべきであり、静岡県はこのことを意識して行動しているつもりである。

(参考)環境影響評価における静岡県とJR東海の認識と見解の違い

	静岡県 (工事により影響を受ける側、工事内容について十分な情報を有していない側)	JR東海 (工事により影響を与える側、工事内容について情報を持っている側)
認識の違い	<p>○工事により影響を与える側と影響を受ける側のリスクコミュニケーション(リスクに関する対話)が進む基本は、相互信頼と情報の開示。(JR東海の説明はそうになっていない)</p> <p>○ゼロリスクを求めている。工事前にリスクを洗い出し、できる限りリスクを回避・低減し、工事中は観測による適切なリスク管理を行うべき。(掘る前にもっと努力すべき)</p>	<p>○国家的プロジェクトであり、推進が必要。</p> <p>○すでに適切な環境影響評価を行った。(県の要求は実現困難で過大)</p> <p>○トンネルは掘ってみなければわからないことが多い。(掘りながら考えるとすべき)</p>
見解の違い	<p>○トンネル湧水量の推定の解析精度が低い。精度の低い解析を基に、「河川流量は増える」「影響はない」という確定論的説明(ゼロリスク論)では納得できない。</p> <p>○生態系、生物多様性への影響は十分評価できていない。事前に影響の回避・低減の努力を行うべき。</p>	<p>○水収支解析モデルの推定精度は高い。</p> <p>○解析によれば、トンネル湧水の全量を戻せば、河川流量は増える。</p> <p>○上流域の地下水位低下により、中下流域の地下水利用に支障をきたす可能性はない。</p> <p>○流量減少が予想される沢等の周辺における生態系への影響は回避困難。流量モニタリングや代償措置等の環境保全措置を実施していく。</p>

## (参考) 国の有識者会議への期待 ～なぜ会議の「全面公開」と「中立性」が重要か～

それは・・・

それが(回り道のように見えて)時短の近道だから

静岡県とJR東海の「立っている基準の違い」を乗り越えるためには、**第三者による助言**が重要

第三者の助言が効果を上げるためには、**第三者への「信頼」**が重要

「信頼」のためには、「**透明性**」「**中立性**」「**科学的根拠**」に基づく**わかりやすい説明**が重要

有識者会議は「**全面公開**」で「**透明性**」と「**中立性**」を確保すべき

3

## (参考) リスクコミュニケーションにおけるリスク認知の乖離への理解

- 受動リスクと能動リスクでは、リスクの認知レベルが大きく異なる。  
リスクの受動側は、情報不足もあって、リスクを無意識に大きく見積もりやすい。  
能動側はその逆で、自らの行動について多数の情報を持っていることと、地域の実情には疎いことから、リスクを小さく見積もりやすい。  
このため、両者のリスク認知に当初は大きな乖離がある。
- 対話(リスクコミュニケーション)によって乖離を小さくしていく。  
**能動側の情報開示、地域の実情への理解、科学的根拠に基づく、分かりやすい説明による相互の信頼関係の構築が重要。**
- 能動側であるJR東海は、これが欠けているため、受動側である**県民に「不信」と「不安」が残るとともに、JR東海は地域の反応が過剰**と思い、**結果として相互の信頼関係の構築ができていき**ない。
- このことは「現実」であり、JR東海はこの現実を受けとめた対応が必要である。
- 静岡県も、自らの姿勢については常に注視していく。

4